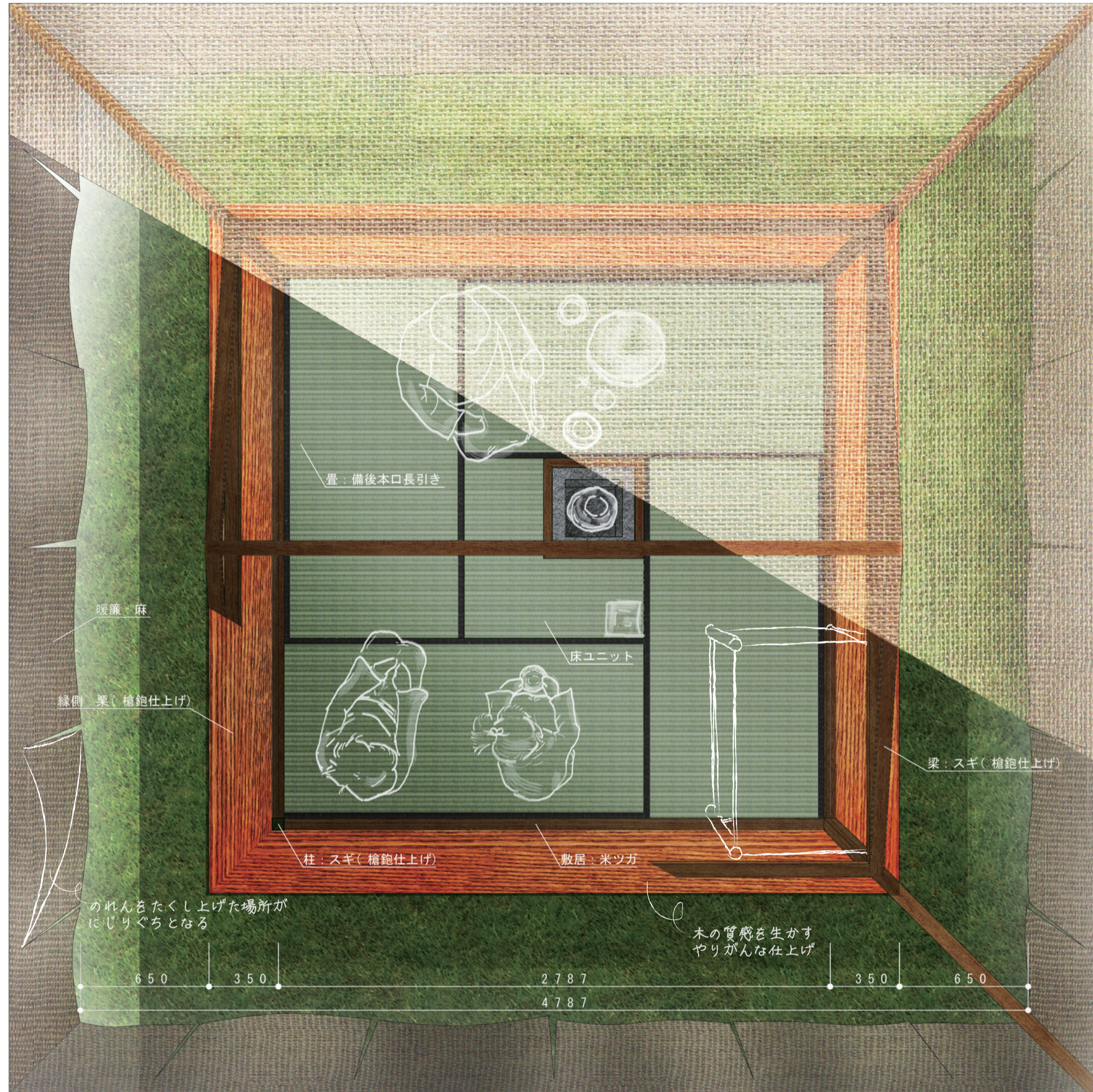
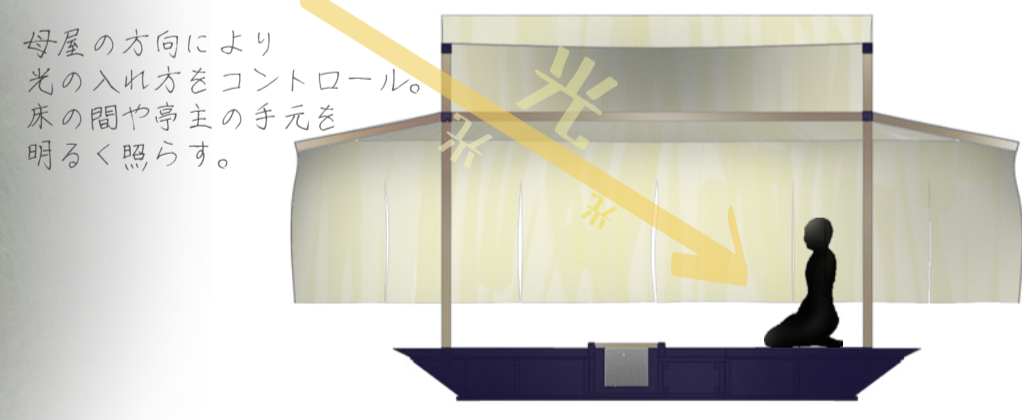
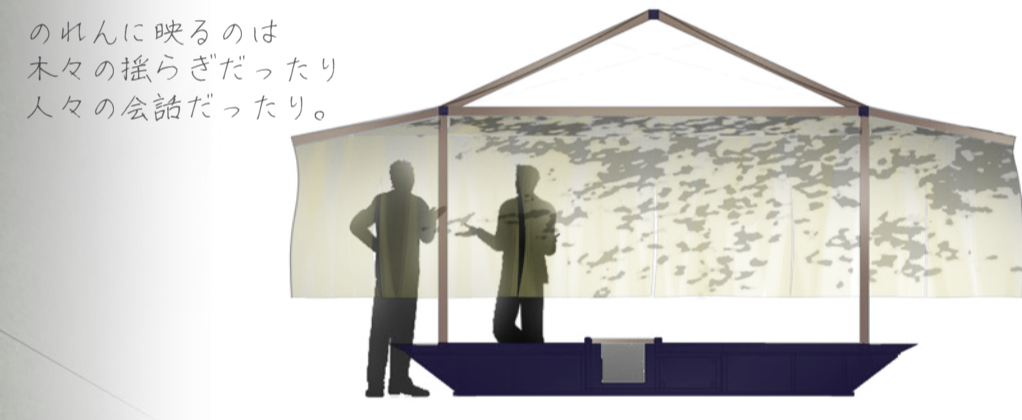
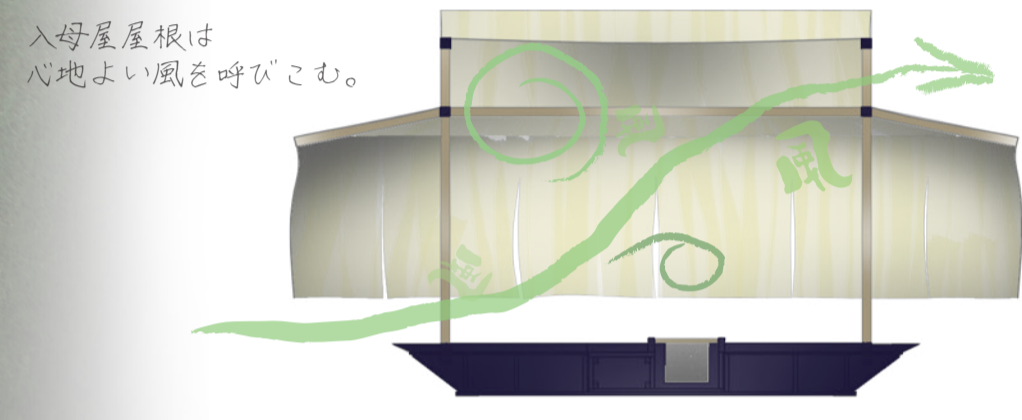
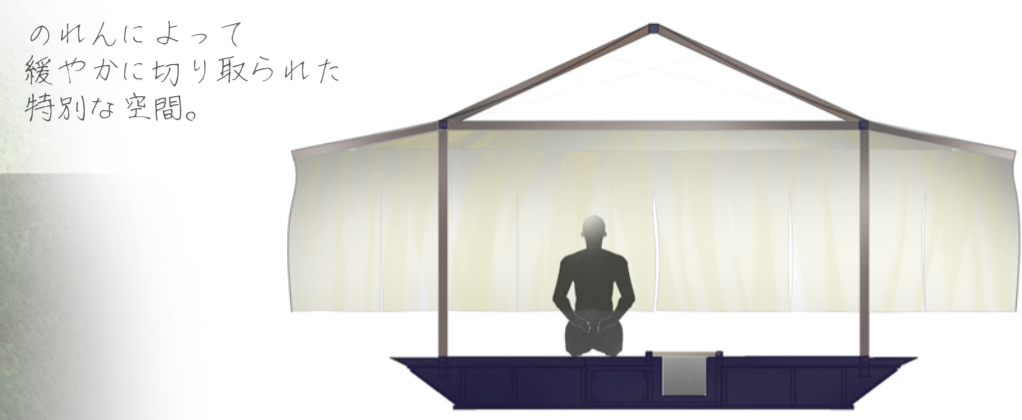


# 不知庵 -SHIRAZUAN-

場所と亭主を選ばない茶室



▲平面詳細図 S=1:20



▲断面図兼展開図 S=1:50

## 仮設という茶室のカタチ

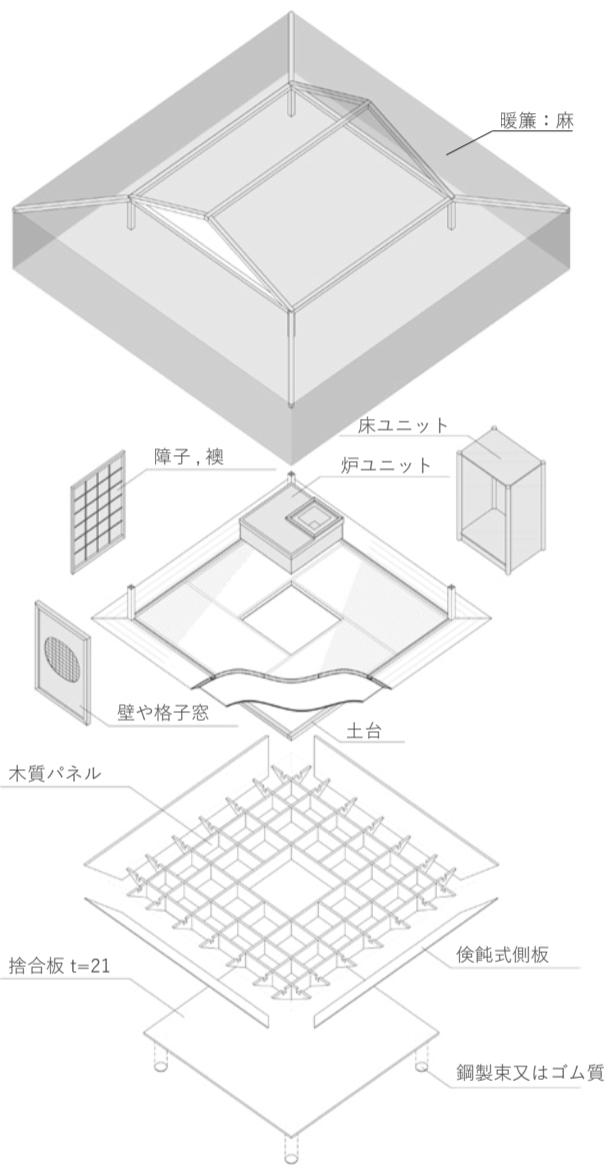
良い茶室は何度も解体と移築を繰り返し、様々な人を楽しまれてきた。そんな茶室の性質は現代の建築のカタチにも通ずるものがある。この茶室は、木のユニットを組み合わせるため大人が二人いれば組み立てられる。大工を必要としないこの茶室は様々な場所に出張して、様々な人を楽しんでもらえるだろう。

## 躡り口に成り代わる“のれん”

もう一つ、茶室の重要な要素である“躡り口”について考える必要がある。躡り口は「躡り入る」という動作を求めることで、身分の差にかかわらず対等な場への変換を促す役目があった。しかし現代では「躡り入る」という行為だけが礼儀を表すものではない。そこで、躡り口の役割を担うものとして“のれん”を用いる。「躡り入る」という動作を、暖簾をくぐる際の「頭を下げる」という動作に置き換えることで、対等な場への変換を促すことができる。のれんを現代の茶室の重要な要素として提案する。

## 亭主の趣向に寄り添う

また、この茶室は亭主の趣向に寄り添うことができる。茶の湯は、亭主によってもてなし方や道具が変わるもの。茶室自体においても同様である。床の位置や炉の配置、光の取り込み方や方角。亭主が変わるごとに茶室も姿を変えるのが理想である。そこで、床や炉などは固定せず全てユニット化し、俵桶を利用して設置する手法をとった。最終的な茶室の“完成”は亭主にゆだねることで、それぞれの茶の湯のカタチを突き詰めることができる。これが現代の茶室のカタチではないだろうか。



▲アクセソメ図  
床ユニット、障子、襖などは、様々な種類があり、亭主のオーダーによって変えられるようになっている。炉壘もユニット化されており、炉の位置を変更したり、普通の畳に差し替えることで、寄付や腰掛けとしても使用することができる。また、一部の部材が腐食、破損した場合、その部分のみの交換で対応できる。



▲立面図 S=1:50

